

西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

寺井章人・杉江天音

1. 目的

西の湖および伊庭内湖は北湖湖岸に比べ春先の水温の上昇が早く、エサとなるプランクトンも豊富であり、ホンモロコ稚魚成育の場として優れているとされている。また過去の研究から両内湖で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、水産資源として漁獲に貢献していることが明らかとなっている。そのためこれら両内湖でのホンモロコ稚魚の生息状況のモニタリングは本種の資源評価に極めて重要であることから、下記調査を実施した。

2. 方法

西の湖では2023年5月9日から7月4日にかけて、伊庭内湖では同年5月9日から6月20日にかけて、概ね2週間に1度の頻度で調査を実施した。両内湖ともに3定点を設け（水草の繁茂状況等により欠測定点あり）、ビームトロール網（小型底曳き網）によりホンモロコ稚魚を採集し、尾数を計数した。ビームトロール網の開口幅(3m)×曳網距離(m)で曳網面積を算出し、各定点のホンモロコ稚魚の面積当たり採捕尾数(尾/m²)を求めた。それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標として過去の状況と比較した。

3. 結果

西の湖では5月後半から6月前半に多くの稚魚が採捕され、昨年よりはやや遅いが例年とほぼ同様の傾向であった。伊庭内湖では5月前半から5月後半まで多くの稚魚が採捕され、例年よりもやや早く、昨年とほぼ同時期であった。ピーク時の生息密度は両内湖とも1.3~1.5尾/m²程度の高い値であり（図1、2）、2023年の稚魚の生息状況は良好であったと推察された。

年により内湖における稚魚の生息状況に大

きく差が見られることから、モニタリングを継続実施することで、その要因を解明しより精度の高い資源評価の実現を目指す。

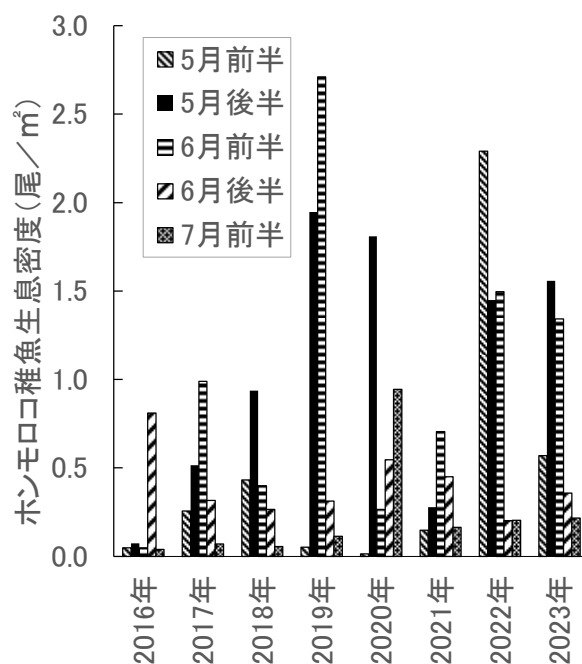


図1 ホンモロコ稚魚生息密度（西の湖）

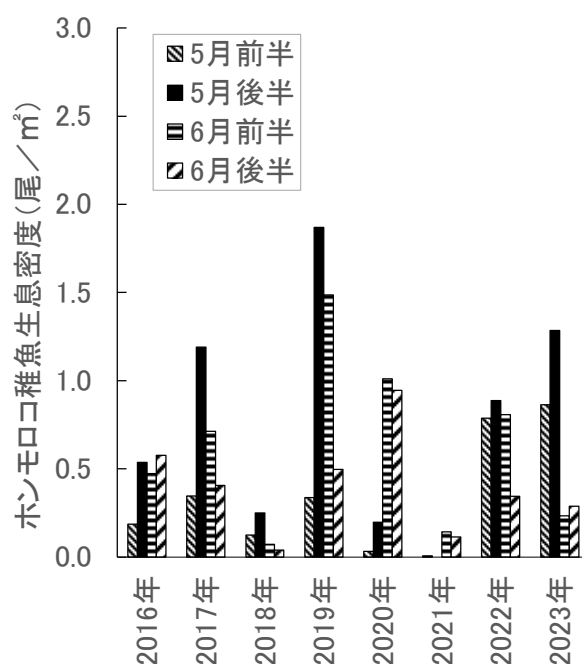


図2 ホンモロコ稚魚生息密度（伊庭内湖）